

# デカルトの流儀

## 方法と省察

2022/06/06



René Descartes  
1596-1650



Marcel Poulenc  
1899-1963

受講生の方々のご希望(リクエスト)により、今期のNHKの木曜講座でプーランクの歌劇《カルメル会修道女の対話》をお見せすることにしました。これは、珍しい「宗教オペラ」です。イエスやそのお弟子や聖職者や聖書物語についてのオペラは数々ありますが、宗教そのものや信仰そのものについてのオペラはあまりありません。それで、講座で、新しく「宗教オペラ」を観るにあたって、その解析方法について省察していましたら、デカルトに行きあたりました。デカルトはその著『省察』で「神」について次のように書いています。

### デカルトの問題

私はつねにこう考えてまいりました。神についての問題と精神についての問題との二つは、神学によってよりはむしろ、哲学によって論証されねばならない問題の最たるものである、と。なぜかと申しますに、私たち信仰ある者にとっては、人間の精神が身体とともに滅びるものではないということと、神が存在するということとは、信仰によって信ずるだけで十分なのでありますけれども、信仰なき人々の場合は事情が別であって、あらかじめこの二つのこと [神と精神] を自然的理性によって証明してみせたうえでなければ、いかなる宗教も、また一般に、いかなる徳のすすめすらも、彼らに受け入れさせることはできないと思われるからであります。

それに、この世においてはしばしば、徳行よりも悪行のほうに、大きな報酬が与えられるものがありますから、もしも神をおそれることも、来世の期待をもつこともないとするなら、利得よりも正道を選ぶ人はほとんどないであ

りましょう。

さて、神の存在を信じなくてはならぬのは、それが聖書の教えるところであるからであり、逆に、聖書を信じなくてはならぬのは、それが神に由来するものであるからだ、ということは、まったく真であります。信仰が神の恩寵の賜物である以上、ほかのことを信じさせるために恩寵を与えるところの神は、同じく恩寵を与えることによって、神自身の存在することをわれわれに信ぜしめることもできるはずだからであります。

なるほど、それで、オペラ《カルメル会修道女の対話》の主人公の侯爵家フォルス家の令嬢ブランシュが、恐怖心を克服して、自ら恐ろしい断頭台の上に並んだのも、神の恩寵を感じて、神の存在を知ったからなのです。それで、現代フランスの作曲家フランシス・プーランク(1899-1963)は「宗教オペラ」を書いたのです。このオペラは、1957年にスカラ座でイタリア語の翻訳で初演され、つづいてパリのオペラ座でフランス語で初演されました。大成功を納めました。世紀末もふくめた現代オペラとして、ドビュッシーの『ペレアスとメリザンド』(1895)とベルクの『ヴォツェック』(1825)につづく作品として絶賛を受けました。

## デカルトの問題

この学問に対するデカルトの物言いは、極めて謙虚です。パリの人類博物館に置かれたデカルトの頭蓋骨にはラテン語で「神々と合体した彼の謙虚な精神は常に人々に語りかける」と書かれています。デカルトの上の文章は、デカルト(1596-1650)の『省察』(1641)の冒頭の箇所です。デカルトの『方法序説』(1637)は有名ですが、この『省察』もまた素晴らしいもので、もっと、有名になって、もっと読まれていい文章です。デカルトが謙虚なのは、ガリレイ(1564-1642)が書いた『天文学対話』(1632)がローマ法王庁から咎められて、裁判で有罪になったことからきています。当時、デカルトが自然界の全体について述べようとした彼の『世界論』がコペルニクスの地動説を認めていたからです。急遽、この本の出版を取りやめました。この時代、なにごとにも謙虚にならざるを得なかったのです。

## 『方法序説』と『省察』

さらに、デカルトの慎重で謙虚な書き方がよく分かるのは、『方法序説』と『省察』の二冊の書の関係においてです。哲学者の三輪正さんは次のように書いています。

自説への反対意見に対するデカルトの対応の仕方にその感が深い。彼は反対意見に極めて敏感であって、『序説』の第6部では、反対論をもつ人は誰であれそれを出版書店に送って下されば、書店から通知を受けて私の答弁を添えるようにつとめよう、それによって読者は反対論と答弁との両方を見て判断を下し易くなるろう、と言い、そして「私はけっして長々しい答弁をするつもりはなく、ただ自分の誤りに気づけば率直にそれを承認し、またそれに気づきえなければ、私の書いたことの弁護のために必要だと考えるところを簡単に述べ、そのさい、何か新たな問題の説明を加えたりして次から次へとはてしなく引きまわされるようなことはけっしてしないつもり」だと書いている。

何でもないのであるが実行の難しいことだと思ふ。それにしてもこんなに親切なサービスを読者に約束する著者がざらにいるだろうか。反対論へのこうした配慮が哲学史上類を見ない形で結実したのが他ならぬ『省察』である。

なるほど、なにかを書いたり述べたりする者は、このようなデカルト的流儀が必要でしょう。私も、お約束します。反対意見の方は、どうぞ、お申し出下さい。答弁いたします — などと平気で書くのは、私のオペラの資料やホームページの「一読百解Ⅰ」「一読百解Ⅱ」には、すでに、遠慮のない意見や反論がどっさり持ち込まれてきているからです。それに対しては、毎日、デカルトのように、ご返事を書いています。いまは、「ワーグナーの《ローエングリン》は悲劇か喜劇か？」と「ヒロインのエルザは悪者か愚者か？」がネットで炎上しています。みなさまも、どうか、ご参加ください。

なかには、極めて優れた卓説もあり、「《ローエングリン》の第3幕への前奏曲とモーツァルト《ドン・ジョヴァンニ》の開幕のシーンの音楽との関係は？」には驚かされました。これは、もう、一局の将棋です。このことについても、来月の7月18日(月・祝)に、名古屋モーツァルト協会の講演会「悲劇は10分前に終わった喜劇：モーツァルトの4大歌劇を中心に」でお話させていただきます。乞う、ご期待。

都築正道

名古屋モーツァルト協会

2022年 第4回例会



K623 都築 正道 顧問

「悲劇は10分前に終わった喜劇：  
モーツァルトの4大歌劇を中心に」



2022年7月18日(月・祝) 午後2時30分開始

今池ガスビル 7F プラザナールーム 052-732-3261

今池交差点南西角 地下鉄今池駅10番出口直結

幹事会は1時15分からです

消毒・換気等の新型コロナ感染防止対策に努めますが、皆様には、ワクチン接種のうえ、マスク着用・アルコール消毒などへのご協力をお願いいたします。感染状況によっては延期・中止もありえます。

名古屋モーツァルト協会 会長 水谷康男

TEL 090-3304-6412